

## I 外国語科・外国語活動における自律した学習者の姿

- コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、必要な語句や表現、方法を選択・決定し、言語材料を駆使して伝え合う姿
- 外国語を用いて相互に理解し合う自然なやり取りの中で、相手に配慮しながら、伝えたいという強い思いをもって、活動上の困難を乗り越えるために既習表現を活用したり、新たな表現を使ったりしようとしながら、表現の幅を広げる姿

## II 授業デザインの取組

- 伝えたいという強い思いを基に、子どもが使いたい表現や方法を選びながら、相手に伝わる実感を伴う体験を積み重ねる活動の工夫
- 表情豊かなやり取りなどのモデル提示や相手との関わりを通して、必要な表現の幅を広げていく学びのスタイルの構築

## III 1年次に生成した仮説

### 1 成果

自分が伝えたいことが伝わるように、困ったときには周囲に助けを求めたり、手元にあるものを使ったりしながら、その場にある、自分がもてる力を総動員して英語でコミュニケーションを図る姿



あまりよく理解していない相手であり、意思疎通するツールが英語しかない相手との交流の場を設定した。

5年「紹介します！ This is my friend.」では、初対面の留学生との交流の場を設定した。子どもたちは、聞きたい質問や話題に沿った画像などのお助けグッズを綿密に準備したり、クラスの友達を相手に事前に練習したりする活動を経て交流に臨んだ。一方通行のスピーチとは違って生のリアクションが返ってきて、困った時には助けを求め、使えるものは何でも使い、もてる力を総動員してコミュニケーションを図る姿が見られた。グループで協力して英語が分からず困っている友達に助け舟を出したり、留学生から質問に嬉々として答えたりしていた。知り尽くした相手との安全なコミュニケーションではなく、何かが起こりそうでドキドキする環境が、相手に興味をもたせ、やり取りを楽しむ意欲の高まりにつながったのだと考えられる。

その場にいる相手と温かい関わりをもちながら、コミュニケーションを続けようとする姿



友達になった相手を、他の人に紹介する活動を、単元の最後に設定した。

単元のはじめに「留学生と友達になろう」という目標を設定した。正確な英語を話すことが目的ではなく、相手のことをよく知ることを最優先にした。留学生にも「子どもたちと友達になってください」とお願いしたため、相手から答えを求められている高揚感もあり、お互いがお互いのことを本時の終わりに紹介するための情報を集める必要感もあり、質問と答えが飛び交う場となった。

子どもが言い間違いをしたとき、留学生は話の腰を折らずに相手のエラーをやんわりと訂正した。コミュニケーションにおいて重要なのは、「もっと話し続けたい」とお互いが思う中で、その場に流れるやわらかい雰囲気共有しながら相手と心を通わせることである。その場にいる全員に敬意を払い、多少の言い間違いには寛容になることが大切であると考えた。

### 2 課題

相手と友達になろうと英語で伝え合う中で、留学生と温かい関わりをもちながら安心してやり取りを楽しむことができた。その一方で、言いたいことがスッと出てこないもどかしさを感じ、失敗への恐れもあつてか発話をためらう子どももいた。これまでの慣れ親しみが一過性に終わっていたことが原因と考えられる。既習表現の取り扱いを単元のみで終わらせず、系統的・横断的に「慣れ親しみを直す場」を意識的に設けることで、子どもにとっての本質的な慣れ親しみとなり、身に付いて使える英語になると考える。

## 5年外国語 相手とつながるコミュニケーション

指導者：山崎 麻絵

### 研究の実践

#### 1 単元「紹介します！ This is my friend.」

#### 2 授業の実際

##### (1) その瞬間になんとかする

普段から英語を使うことを楽しむ子どもたちだが、今一つコミュニケーションに対する貪欲さがない。相手の言うことに特に興味はなく、よく知る相手と何もわざわざ英語で話す必要はないと思っている雰囲気さえ感じてしまう。それなら、もしも相手のことをよく知らず、意思疎通のためのツールが英語しかなければ、英語を駆使するようになるのではないか——。もっと渴望して英語を欲しがらせたいという、欲張りでちょっと意地悪な気持ちから、この単元を計画した。

「留学生と友達になろう」というテーマの下、実際に海外からの留学生を迎えた。聞きたい質問や話題に沿った画像などのお助けグッズを綿密に準備したりクラスの友達と「練習」したりして本時に臨んだ。ところが、用意周到な計画はすぐに打ち碎かれることとなる。一方通行のスピーチとは違って生のリアクションが返ってくる。留学生にも「子どもたちと友達になってください」とお願いしたため、予想外の質問まで飛んできてしどろもどろ。困ったときには周りに助けを求め、使えるものは何でも使い、もてる力を総動員して留学生と話す姿が見られた。

普段の外国語科における活動にはほとんど興味を示さず「何もわざわざ…」と一番思っていそうなA児は、率先してグループの友達に助け舟を出し、留学生の質問に嬉々として答えていた。一体何が彼を変えたのか。いつもの分かり切った顔なじみの相手との安全なコミュニケーションではなく、何かが起こりそうでドキドキする流動的なやり取りが、A児の心に火を点けた。予想外の応答が返ってくるかもしれないという不安が、吊り橋効果のように相手に興味をもたせ、相手とのやり取りを楽しむ意欲の高まりにつながった。



##### (2) 自分も相手も気持ちのいいコミュニケーション

ある男性タレントが不思議な英語を駆使して世界中の人とやり取りをする番組をご存知だろうか。あの英語が通じてしまい、人々が皆笑顔なのはなぜか。それは、あそこに流れる空気が優しく、誰も英語の間違いを指摘しないからではないかと思う。

ゲームが好きなB児は、eスポーツの「大会」について話をしたかった。それを察したグループの友達はよかれと思って「festival」という単語をひねり出してB児にささやいた。それを聞いた留学生は、文脈から意味を理解して「competition」と言い換えた。話の腰を折らずに相手のエラーをやんわりと訂正したのだ。その場にいた子どもたち全員が言葉の意味を正確に理解するのはもっと後のことだろうが、確かなことは、あの瞬間には誰一人として嫌な気持ちになっていなかったということだ。

教師は、できれば正確な英語を子どもに話させたいと思うし、子どもも極力間違わずに英語を話したいと思っている。だが、実際のコミュニケーションにおいては、その場に流れる雰囲気やわらかさこそが命ではないだろうか。子どもたちに必要なのは、エラーを指摘されることなく、相手と心を通わせること。「もっと話したい」「このトークを続けたい」とお互いが思えるかどうか。留学生と話したくて仕方のないC児は、一旦ストップした交流を再開する「あと5分」という言葉に、「やった！」とガッツポーズをした。活動後、留学生を見送った後、頬を上気させて「楽しかった！」と声を上げたD児。独りよがりではなくその場に居る全員に敬意を払い、少しくらいの言い間違いには寛容になって同じ時を過ごす大切さが見えた。

留学生とのドキドキハラハラの交流から数か月後のこと。自分の住んでいる地域のよさについて、英語でクラスの友達に紹介する活動で「まだまだ知らないことってあるんだな」と気付いたE児。「英語で話したら、普段は話せないことを知ることができておもしろかった」と振り返ったF児。わざわざ英語を使わなくても通じ合えるはずだった相手とのコミュニケーションにおいて、ツールとしての英語が新たな架け橋になった。

